爆>等の新しい単語が多数掲載されていること；綴字と発音とが合致しない特殊な発音を逐一指摘していること；従来の緬英辞書にはみられない意味の新規説明があること等，利用価値はきわめて高い。一方，文例がほとんどみられない；各単語に発音表記がない；文字の配列順序が従来の辞書（例えばジャドソン）とは異なっているばかりか，W. S. Cornyn & J. K. Musgrave, *Burmese Glossary*. New York: 1958. にも従っておらず，独特の配列形式をとっているため，従来の辞書を使い慣れた人にはかえって不便である等の難点がある。

編者は，現在 Burma Historical Commission のスタッフの一人で，漢籍史料を基にビルマ史を研究中の歴史学者である。発表した研究論文も少なくなく，特に *B. B. H. C.* に掲載された論文 "The Chinese Inscription at Pagan" (vol. I no. ii, 1960. pp. 153-157) は，サラブハ（鹿）門で発見された一面がピュー語，他面が漢語の未解読碑文をはじめて解読した論文として，その功績は高く評価されよう。　（大野　徹）

Maung Ba Han. *The University English-Burmese Dictionary*. pt. I-X, Rangoon : Hanthawaddy Press, 1951-1966. 2292 p.

1962年の革命政権成立後，ビルマでは次々と新しい英緬辞典が刊行された。例えば *The Academy English-Burmese Illustrated Dictionary*. Rangoon : 1962. U Tin Tun, *The Concise English-Burmese : Burmese-English Dictionary*. Rangoon : 1964. *Khit Thit English Burmese Dictionary*. Rangoon : 1965. 等がそれである。

ところで，ここでとりあげたバハン博士編の英緬辞典は，1951年の第1部からはじまって1966年に第10部が完成した事からもわかるように，実に息の長い労作である。もちろん編者は多数の人，特にラングーン大学の U Wun, 女婿の U Tin Thein 等の協力の下に，この辞典を編纂したわけだが，これだけ丹念にまとめあげた英緬辞典は，U Tun Nyein, *The Students English Burmese Dictionary*, supplemented by U Tun Aung Gyaw. Rangoon: 1957. を凌駕するものといっても過言ではないと思われる。ただ難点をいえば，発音符号が全く附せられていない事で，在来の英緬辞典に残されていた課題の一つが未だ解決されていない点にある。対象言語の何語たるかを問わず，これからの辞書編纂には国際音声符号による発音表記が不可欠条件の一つである。

ともあれ，本書は，収録語彙の量はもちろんのこと，例文もふんだんにとり入れられており，英語を学ぶビルマ人にとって，有益なガイドの役目を果たす立派な辞典の一つだといえよう。

編者のバハン博士は，第二次世界大戦中，日本の軍政下において，ビルマ学芸院の辞書編纂部のスタッフをつとめた経験をもつ人物である。

ビルマにおける辞典編纂の現状をうかがい知り得る一つの代表例として，本書を紹介したい。

（大野　徹）

Bo Taya. *Yebaw Thong-gyeit Pyidaw byan-gan*. Rangoon : Hkyobyu-sabay, 1966. 227 p.（ボウ・ターヤー著『三十志士の凱旋』）

第2次世界大戦の勃発に伴って，反英独立を主張するドウ・バマーアシーアヨウン（別名タキン党）は官憲の弾圧によって地下活動を余儀なくされたが，党書記長のタキン・アウンサン（逮捕状が出ていた）は海路中国へ脱出，日本軍憲兵神田少佐の手引で東京に向かった。いったんひそかにビルマに帰ったアウンサンは，同志を募り「南機関」の下で軍事教練を受けビルマ独立軍を結成，日本軍のビルマ進撃と同時に，タイからビルマへ凱旋したことは，今日ではあまりにも有名な歴史的事実である。

このビルマ独立軍の母胎となったいわゆる「三十人の志士」達，およびビルマ独立軍に終始一貫援助指導を与えた大本営直属の「南機関」等に関する信頼すべき資料が，日本側の記録であることはいうまでもないが，反面ビルマ側の記録はさほど多くは知られていなかった。

本書は純粋の学術研究書ではないが，元「三十人の志士」の一人ボウ・ターヤーが，自己の体験を基にまとめた一種のドキュメンタリー文学として一読に値する。海南島に特設された陸軍士官学校での「三十人の志士」達の猛訓練ぶりから筆を説き起こし，バンコクでのビルマ独立軍の編成，3隊に分かれてのビルマ進撃，そしてついに著者の郷里ピンマ

ナーへ無事帰り着いたところで終わっている。チェンマイ出発後，タイの平地から山岳へ分け入り，うっそうと茂る森林地帯をかき分け，山腹に点在するカレン人村落をいくつも経て苦心惨憺の末，タイ・ビルマ国境を突破するくだりは，さすがに体験に基づいているだけに文章もイキイキとしていて，正に本書の圧巻だといってよい。

著者は，ボウ・ネーウィン（現ビルマ革命評議会議長ネーウィン将軍）の率いる第2班（ビルマ国内での後方攪乱担当）所属の将校で，アウンサン将軍が率いる作戦司令部（第3班），ボウ・チョーゾー，ボウ・ジンヨー等の第1班（正規軍）のビルマ進撃に呼応して蜂起したわけである。

「三十人の志士」達は，ビルマ独立後バラバラになった。ボウ・レッヤーのように実業界に入ったもの，ボウ・イェートゥッのように共産党に入党，地下活動に転じたもの，ボウ・アウンサンのように暗殺されたもの等，流動する歴史の重さをヒシヒシと感じさせられる。

本書は，「南機関」の長であった鈴木敬司元陸軍少将が直接著者から進呈され，同じ南機関の高橋八郎元大尉（現ビルマ大使館 Liaison Officer）の手を経て，私に邦訳を依頼してきたものであるが，ビルマ独立軍の活動を内面から描いたものとして貴重な資料であるところから，翻訳に先だちあえて紹介の筆を執った次第である。　（大野　徹）

G.B. Milner and Eugénie J.A. Henderson (eds.) *Indo-Pacific Linguistic Studies*. Part I, Historical Linguistics (xv+514p.); Part II, Descriptive Linguistics (viii+571p.), Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1965.

1965年1月，ロンドン大学 SOAS の主催による Conference on Linguistic Problems of the Indo-Pacific Area がロンドンで開催されたが（泉井久之助「輓近南方諸言語研究の動向」『東南アジア研究』III-2. pp. 74-参照），本書はそのときに提出された論文をまとめたものであって，同時に出版された雑誌 *Lingua* 14, 15 (1965) と同じ内容である。Part I には historical, comparative な論文25編，Part II には descriptive, typological, sociological なもの24編が収められている。

言語系統別にみていくと，ムンダ語については Biligiri の Sora 語動詞研究，Zide の Proto-Munda の再構などがある。モン・クメル語では Jacob のクメル語数表現の研究などがあるが，この系統の言語を比較言語学的に考察した本格的な論文はない。チベット・ビルマ語では，Rawang 語 (Morse)，ビルマ語 (Allot) の動詞表現の研究などもっぱら文法に関するものが収められ，特殊なものとして Okell の Nissaya Burmese 研究がある。逆にタイ系言語に関する論文は4編とも比較研究である。

オーストロネジア語については従来の比較研究に対する批判を述べた論文が多い。古バリ語資料の評価 (Teeuw)，Rotuma 語における同系言語からの借用要素の問題 (Biggs) など。借用要素に関してはこのほかタガログ語におけるスペイン語要素を論じたもの (Lopez) がある。オーストラリアの言語にはわれわれは直接の関心をもたないが，Wurm によるオーストラリア語の研究動向の紹介2編は役に立つ。

以上のような historico-comparative または descriptive というオーソドックスな論文のほか，類型学的比較研究 (typology) と言語と社会を扱ったものとが若干収録されている。いちおう系統から離れて音韻論的特徴などによる言語地域設定の試み (Henderson)，必ずしも新たな考えではないが概念が名詞的・動詞的のいずれかによる言語の分類 (Capell)，言語と方言 (Kähler)，national language の問題 (Alisjahbana) など。

参考のため執筆者名を列挙しておく。

Anceaux (Austronesian), Allot (Burmese), Alisjahbana (Malay), Biggs (Rotuman), Buse (Rarotongan), Biligiri (Sora), Chrétien (Austronesian), Cowan (Oirata), Condominas (Mnong Gar), Constantino (Philippine), Capell (Australian), Dyen (Formosan), Elbert (Polynesian), Egerod (Atayal), Gedney (Yay), Haudricourt (Oceanic), Henderson 2編 (Khasi; SEA laguages), HlaPe (Burmese), Holmer (Austronesian), Izui (Micronesian), Jones